

〔報 告〕

母親付き添い入院児のきょうだいに現れる問題 — 家族への援助を考える —

鳥居 央子¹⁾ 杉下 知子²⁾

要 旨

母親の付き添い入院により、きょうだいに現れる影響とその要因を明かにするために、母親へ質問紙調査を実施した。

その結果、母親の不在中きょうだいの養育を担当したのは、祖母、父が多く、別居している祖父母宅等自宅外に預けられたものは約 1/3 であった。父親の協力内容としては、家事、精神的なサポートが多く、協力がなかったものも約 15% みられた。付き添い中の母親のきょうだいへのかかわり方としては、電話や帰宅、状況の説明など努力しているものが多い反面、「帰宅せず」が約 40% 見られた。また、きょうだいについての印象は、楽観的なものと悲観的なものがほぼ同数であった。きょうだいの反応としては、母親に甘える行動や言動が多いが、母親へ直接気持ちが出せないものもみられた。後者には、①年齢が低い、②付き添い期間が長い、③自宅外で養育されている、④状況の説明をしていない、⑤母親が楽観的である、などの傾向がみられた。また、a. きょうだいにとっては養育の人よりも環境の変化が重要であること、b. 母とのかかわりは物理的なものよりも精神的なものが重要であること、c. 父親は、母や家事に直接かかわる努力が必要であること、d. きょうだいの気持ちの中で大事なものはきょうだいが病気であることよりも母の存在であること、が示唆された。したがって、家族の状況を整えることができるように、看護の体制を確立することが重要であると考えられた。

キーワード：付き添い入院、きょうだい、母とのかかわり、父親の協力

I. 目 的

小児が家族と離れて入院すると、母親や家族からの分離不安、環境の変化への不適応などによる反応が多く見られ、退行や問題行動などが起こることがある。その予防・対応のために、病室環境の改善や面会時間の延長、母親の看護への参加や母子入院等がすすめられている。

一方、入院に母親が付き添う場合、家に残された入院児のきょうだいに変化がみられるという¹⁾²⁾³⁾。また、Burton⁴⁾、Peck⁵⁾、Lavigne & Ryan⁶⁾、羽場ら⁷⁾は、

病気を持つ小児のきょうだいに情緒面や行動の問題が多いと述べており、入院児のきょうだいでは、さらに母親不在や環境の変化が重なり、不安や不適応などのマイナスの影響が大きく現れることが予想される。しかし、一方で、思いやりや自立といったプラスの影響も報告されており²⁾³⁾、母親や家族の対応の仕方や子どもの発達段階や個性、家族や学校等における位置や役割等によつては、きょうだいにとってよい経験となると考えられる。

ところで小児では、ケアにともなう母親あるいは養育担当者の負担が大きく、小児の看護を考える場合には、小児本人へのケアと同じ比重で母親への援助を考えることが必要となる。病児のきょうだいの問題の要因としては、病児や病気よりもむしろ母親

1) 北里大学看護学部

2) 東京大学医学部健康科学看護学科家族看護学

や家族の状況やコミュニケーションの方が大きいという報告もあり⁸⁾⁹⁾、母親への適切な援助が効果的と考えられる。

これまで、入院に母親が付き添う場合のきょうだいへの影響については、きょうだいや母親を含む家族や環境それぞれの客観的な条件による差をみたものがほとんどであり、母親とのかかわり方や考え方や態度による違いはほとんど明らかにされていない。

著者らがこれまでにかかわった、付き添い中の母親に対する面接調査では、きょうだいに、母親の付き添いや環境変化によると思われる反応がみられること、また、その反応はきょうだいの年齢や世話をした人、母親の考え方により、差があることが明らかになった¹⁰⁾。

本研究ではさらに、きょうだいに現れる影響とその要因を定量的に明らかにするために、質問紙調査を実施し、母親への援助の方法を検討した。

II. 対象と方法

1. 調査票の作成

次の項目を含む調査票を作成した。

- 1) 入院児と家族に関すること
(年齢、性別、病名、入院期間と付き添いの有無と期間、家族構成)
- 2) 付き添い中の養育担当者とその方法
- 3) 付き添い中のきょうだいのようす
- 4) 付き添い中の母親のきょうだいへのかかわり方と意識
- 5) 父親の態度

このうち、3)～5)については、付き添い中の母親に対する面接調査¹⁰⁾で得られた回答を選択肢として用い、きょうだいが複数いる場合には、一番年の近いきょうだいについて、記載するように依頼した。

2. 調査対象と方法

T大学病院(医学部小児科病棟および歯学部病棟)に、平成4年～5年に5日以上入院した12歳未満児

表1. 調査対象児(入院時)について

入院期間 (複数回入院も有)	1週間以内	17 (30.9%)
	～1ヶ月まで	21 (38.2)
	～1ヶ月以上	17 (30.9)
きょうだい数	1人	40 (72.7)
	2人	13 (23.6)
	3人	1 (1.8)
	4人	1 (1.8)
母親の付き添い期間	2週間以内	38 (69.1)
	～1ヶ月まで	6 (10.9)
	～1ヶ月以上	11 (20.0)

(死亡退院したものを除く)とその家族を調査対象とした。対象となった入院児は、心臓、神経、血液などの慢性疾患児あるいは口唇口蓋裂の手術を受ける児であり、総数は248人であった。その保護者宛に調査票を郵送し、各自記入の上、返送してもらうよう依頼した。本調査は、平成5年11月から12月に実施された。

3. 分析対象

回答のあったものは122家族で、そのうち入院期間中母親が付き添い、入院児にきょうだいがある55家族を分析対象とした。分析対象となった家族では、全員母親が回答していた。分析対象の入院児の入院期間(複数回入院の場合には、合計日数とした)は、1カ月以上のものが約30%であった。きょうだい数は、一人のものが最も多く、母親の付き添い期間は、2週間までが約70%、1カ月以上が約20%であった。入院期間、きょうだい数、母親の付き添い期間の内訳は、表1に示した。

4. 分析方法

まず、付き添い中のきょうだいの状況、母親のきょうだいに対する意識とかかわり方、きょうだいに現れた反応について、集計した。さらに、きょうだいに現れた反応が、子どもや家族の条件によってどのように異なるか考察した。なお、今回は、複数きょうだいがいる場合には、入院児と一番年の近いきょうだいについて記載してもらうように依頼したため、分析対象がそのように限定されている。

III. 結 果

1. 分析対象児のきょうだい(以下きょうだいという)について

母親の付き添い期間中のきょうだいの状況について、表2に示した。

母親の付き添い期間にきょうだいの面倒をみた人は、別居の祖母が最も多く約33%、次いで同居の祖母(約27%)、父(約25%)であった。また、同居別居いずれの場合も、母方祖母が父方祖母より多かった。面倒をみってくれる人が別居で、その家に預けられたケースは約1/3であった。

父親の協力内容としては、「付き添いを代わる」(約20%)よりも「家のことをする」(約40%)というものが多く、精神的なサポートがあったものが約4割

表2. 母親つきそい期間中のきょうだいの状況

母の付き添い中の主たる養育者	父	14 (25.5%)
	同居の父方祖母	5 (9.1)
	同居の母方祖母	10 (18.2)
	同居の父方祖母	6 (10.9)
	別居の母方祖母	12 (21.8)
	その他	7 (12.7)
	不明	1 (1.8)
母の付き添い中の養育場所	自宅	34 (61.8)
	養育者宅	19 (34.5)
	不明	2 (3.6)
父親の協力内容(複数回答)	ほぼ毎日付き添いを代わる	5 (9.1)
	週末に付き添いを代わる	6 (10.9)
	家事をする	19 (34.5)
	保育園などの送迎	3 (5.5)
	精神的な支え	21 (38.2)
	忙しく、協力は無理	8 (14.5)

ある反面、協力がなかったものも約15%みられた。

2. きょうだいに対する母親の意識とかかわり方のようす(表3)

付き添い中の母親のきょうだいへのかかわり方としては、電話や帰宅をできる限り行つたと答えたものが20%~44%あり、努力しているようすがみられる反面、「帰宅せず」(40%)「電話でも積極的に話さない」と答えたものも少なくない。また、状況の説明をしたものは約40%であった。

きょうだいについての印象としては、「心配せず、大丈夫」という楽観的なものと「つらかった、いつも考えた」という悲観的なものがほぼ同数にみられた。

3. きょうだいに現れた反応とその要因

結果を表4に示した。

母へ甘える態度や言動(「帰ってという」「離れない」など)やがまんしているようすのものが多くみられた。また、反応は、きょうだいの年齢によって異なる傾向がみられた(図1)。年少児では、状況を理解できなかつたり(反応番号8等)、状況を受け入れられずに、退行したあるいは引きこもつたあるいは身体が反応したと思われるもの(同2, 10, 11等)が多く見られた。はっきり母親に気持ちを表現している(同1, 3, 4, 5, 6等)のは、年長のものに多かった。がまんして努力しているようすは全年齢にみられたが、よい影響と思われるもの(同16, 19, 20等)は中学生に多かった。

現れた反応の中で、母親へ直接気持ちを表現しない傾向のあるものの条件を検討した。ここで、「母親

表3. 母親のきょうだいに対するかかわり方と意識

母親のかかわり方(複数回答)	電話や面会などで、ほぼ毎日話した	24 (43.6%)
	帰れる時には、家に帰った	14 (25.5)
	家に帰ったときには、話したり遊んだりした	11 (20.0)
	入院や付添いについて、説明した	21 (38.2)
	付添い中は、家に全く帰らなかった	23 (41.8)
	電話をしても、わざわざ呼ぶことはしなかった	6 (10.9)
	家にあまり電話しないようにした	2 (3.6)
きょうだいに対する母親の印象(複数回答)	それほど心配しなかった	14 (25.5)
	大丈夫だと思った	19 (34.5)
	今は、入院している子の方が大事と考えた	12 (21.8)
	毎日考えてしまった	15 (27.3)
	考えると(見ていると)、つらかった	16 (29.1)
	接してあげないといけないと思った	15 (27.3)

表4. きょうだいに表れた反応 (複数回答)

1. 電話などで「いつ帰ってくるの」と聞いた	20 (36.3%)
2. おかあさんにくっついて離れない, 後追い	9 (16.4)
3. 面会時に「おかあさん一緒に返ろう」	5 (9.1)
4. おかあさんとの電話で泣いてしまった	1 (1.8)
5. おかあさんに「寂しい」と言った	3 (5.5)
6. おかあさんに「早く帰ってきて」と言った	15 (27.3)
7. 寝るときに泣いた	12 (21.8)
8. 代わりに世話をする人にとまどっていた	1 (1.8)
9. 部屋にとじこもるようになった	0
10. 食事の量が減った	3 (5.5)
11. 熱が出た	7 (12.7)
12. 喘息が出た	1 (1.8)
13. どもりが出た	1 (1.8)
14. よい子でいた	25 (45.5)
15. がまんしている様子だった	32 (58.2)
16. わがママをいわなくなった	7 (12.7)
17. 面会で会っても, 最初のうちそばに来ない	4 (7.3)
18. 電話で「おかあさん」と言わなかった	0
19. 身の回りのことが自分でできるようになった	5 (9.1)
20. お手伝いができるようになった	3 (5.5)
21. ことがたくさんできるようになった	3 (5.5)
22. しっかりしてきた	12 (21.8)
23. その他	11 (20.0)



図1. 反応の年齢による違い

(年齢グループ別に, 多く見られた反応をまとめたもの: 図中の番号は, 表4の反応に付してあるもの)

へ直接気持ちを表現しない」傾向というのは, 母親に対し直接「帰って」「寂しい」等の気持ちの表現をしていない(反応番号1, 3, 4, 5, 6の見られないもの), あるいは母親の見えていないところで泣いた(同7)ものとした. 該当するものは, 39人(70.5%)であり, 年齢の低いもの, 母親の付き添い期間が長いもの, 母親付き添い期間中の養育場所が自宅でないもの, 母親が状況の説明をしていないもの, 母親の印象が楽観的なものが多く見られていた. しかし, 付き添い中の養育者, 母親のかかわり, 父の精神的サポート, 入院期間, 病気の種類の違いでは, 差は見られなかった.

IV. 考 察

1. きょうだいの状況と母親の意識・かかわり

母親の付き添い中のきょうだいの状況を見ると, 養育者は父よりも祖母が多い. 祖母特に母方祖母が協力可能な場合に, 母親の患児への付き添いが可能となることが多いと考えられる. また, 祖父母で養育している場合では祖父母宅で預かるケースも多く, きょうだいへの負担は大きいと思われた.

父の協力の仕方の選択肢として, 「精神的な支え」というものを用意したのにもかかわらず, 「忙しくて協力できない」としたものが15%あり, 祖母がいると, 親としての役割を任せて, 普段の生活をしてしまう父親もいるのではないかと思われた. 努力して付き添いや家事を交代で行う父もいることを考えると, サポートを考える場合には, 父親の意識を高め参加させることは可能と思われ, 外からの援助の手を増やすよりも重要なことであろう.

付き添い中の母親のきょうだいとのかかわりをみると, 努力をしているものと, 患児を中心に考えきょうだいとのコミュニケーションが疎遠になるものとの両方がみられた. また, きょうだいへの意識が楽観的なものと悲観的なものとが半々にみられたが, かかわりと意識との間に関連はみられず, 患児や付き添い環境も含めた母親の側と養育環境を含めたきょうだいの側の双方に, 意識やかかわりを決定する要因があるのではないかと考えられた.

きょうだいへ状況の説明がなされているものは約40%であるが, なされていないものでは母親へ気持ちを直接伝えない傾向が見られており, きょうだいが気持ちを表現できる場を失っているように感じられた.

2. きょうだいに表れた反応とその要因

きょうだいの反応(表4)のうち, 母親へ直接示した態度や言動は, 全体的に健全なものと思われる. すぐに状況を改善できるわけではないが, 気持ちを直接表現できたことに意味があると考えられた. これ

らの反応をみると子どもなりに努力している様子も
うかがわれる。しかし、これらの結果は、母親の判断
によるものであるため、実際に見られたものだけで
なく、母親のこうあつてほしい気持ちも含まれてい
ると考えられる。

そこで、望ましくない反応が見られたケースを取り
出すのではなく、母親へ気持ちを伝えないでいる
ケースを取り上げた。結果に示したように、そのよう
なケースは、全体の70%と多く見られ、①年齢が低
い(幼児期以下)、②付き添い期間が長い、③自宅外
で養育されている、④状況の説明がされていない、⑤
母親が楽観的である、などの傾向がみられている。こ
れらは、患児がまず大事で、健康な子は大丈夫、特に
年少児には理解できないだろうといった気持ちを母
親が持ちやすいことを示しているのであろうと思わ
れ、援助が必要な条件と考えられる。

一方、父が養育しているか、母がよくかかわってい
るか、父の精神的サポートがあつたか、入院期間が長
いか、病気がなんであるか等は、予想に反して、母親
へ気持ちを伝えているかどうかとの関連はみられな
かった。以上のことから、母親が病児の付き添いをす
るきょうだいにとっては、a. だれが母親のかわりに
面倒を見てくれるかよりも、生活の場所の変化が重
要であること、b. 母とのかかわりは物理的なものよ
りも精神的なものが重要であること、c. 父親は、母
や家事に直接かかわる努力が必要があること、d. き
ょうだいの気持ちの中で大事なのは病児よりも母の
存在であること、が考えられた。

3. 必要なサポートと今後の課題

入院児のきょうだいに現れる問題予防のための一
つの方法として、2. で述べた①～⑤に該当するもの
では、付き添いの交代を勧めたり、父親の協力を得ら
れるようにサポートする、あるいは看護者がきょう
だいの様子を把握し母親とコミュニケーションをよ
くとれるように働きかけるなどが必要と考えられ
る。また、2. のa～dに述べたことから、家族の努力
や周囲のサポートによって問題の予防が可能である
ことが示唆された。

以上のことは、母親や家族が問題の重要性やその
対処の方法について理解した上で、行動できるよう
にすることが重要であり、特に病棟では、母親が安心
して外出や面会を行えるように患児への看護を行
い、母親以外の付き添いにも十分対応できる体制を
整えることが望ましい。すなわち、母親の「付き添い」
は、看護の不足を補うものではなく、患児へのより効
果的な看護のために行われるのものであるという意
識を看護者が持つ重要性が再確認された。

本研究では、きょうだいに現れる反応を母子関係
からとらえたが、母親の役割を助ける父親や家族の
影響も大きいと考えられ、きょうだい自身がどうと
らえたか、あるいは家族成員それぞれがどうとらえ
るかをみる必要を感じた。また、今回は、きょうだい
の付き添い期間中のようすを聞いたが、どのような
影響を受け、その要因は何であつたかについては、長
期に見る必要があり、さらに検討を加える必要性を
感じた。

〔受付 '97. 5. 30〕
〔採用 '98. 4. 27〕

本論文の一部は、日本家族看護学会第3回学術集会(1996年9
月千葉市)において発表した。

文 献

- 1) 駒松仁子, 井上ふさ子, 小田原良子他: 小児がんの子供と
家族の実態調査(第二報) 付添いが家族に及ぼす影響につ
いて, 小児保健研究, 50(4): 521—525, 1991.
- 2) 太田にわ, 萱嶋淑子: 小児の母親付添いによる長期入院
が家族に及ぼす影響 第一報 家に残された同胞への影
響, 看護展望, 17(4): 494—498, 1992.
- 3) 太田にわ, 小野ツルコ, 太田武夫他: 小児の母親付添い
による長期入院が家族に及ぼす影響 家に残された同胞の
精神面への影響, 岡山大学医療技術短期大学部紀要, 3:
55—61, 1992.
- 4) Burton, K.: The Family Life of Sick Children. Routledge and
Kegan Paul, London, 1975.
- 5) Peck, B.: Effect of Childhood Cancer on Long-term Survi-
vors and their Families. British Medical Journal, 1: 1327—
1329, 1979.
- 6) Lavigne, J.V., Ryan, M.: Psychologic Adjustment of Siblings of
Children with Chronic Illness, Pediatrics, 63: 616—626, 1979.
- 7) 羽場敏文, 村上良子, 安部治郎他: 心身症を発症した慢性
疾患児の同胞4例の検討, 小児保健研究, 52(6): 609—
611, 1993.

- 8) Taylor, S.C.: Siblings need a plan of care too. Paediatric Nursing, 6: 9—13, 1980.
- 9) Ferrari, M.: Chronic Illness: Psychosocial Effects on Siblings, Journal of Child Psychology and Psychiatry, 25: 459—476, 1984.
- 10) 上山裕美子: 小児の母親付添い入院がきょうだいに及ぼす影響と、それに関係するいくつかの要因について, 東京医科歯科大学医学部保健衛生学科看護学専攻1994年度卒業論文, 1995.